

原 著

中国における高校教員の労働ストレス

Work stress in high school teachers in China

王 穎

Ying WANG

北海道大学大学院教育学研究科

Graduate School of Education, Hokkaido University

抄 録

近年中国においては、一人っ子政策などによって、初等中等教育現場における教育競争が過熱している。この中で、教員の労働も過密化し、過労や心身の病気の増加が問題となってきた。本研究は、中国の東北部に位置している黒龍江省の高校教員を対象として、教員の勤務状況と健康実態および労働ストレスを明らかにすることを目的とした。2007年11月～12月中旬にかけて黒龍江省の高校教員311名に対してアンケート調査を行った。分析の結果、中国教員の勤務実態は多忙化が進んでいること、教員の健康実態が深刻な問題を抱えていること、および多忙と健康状態はかなり密接な関係があることが明らかになった。また、「仕事の量的・質的な負担度」が教員の主なストレス要因であり、「身体愁訴」「抑うつ感」が主なストレスの反応であったことが明らかになった。

Abstract

Recently, the competition in primary and secondary education in China has become more intense because of the one-child policy and other reasons. During this process, the workload of teachers has also become heavier; problems of extreme fatigue and mental illness are increasing. This study investigated working status, health, and work stress of 311 high school teachers of Heilongjiang Province in Northeast China. This questionnaire survey was done during November and December in 2007. According to the analysis results, teachers' workloads have become heavier and heavier, and there are also some serious problems in teachers' health status. The results showed a close relation between excessive workload and health status. They also showed that "qualitative and quantitative workload" is the main reason for teachers' stress, and the major reactions to such stress are "physical complaints" and "depression".

キーワード：高校教員、労働実態、多忙化、メンタルヘルス、ストレス

Key words: high school teachers, work status, overload work, mental health, stress

I. はじめに

近年、中国では急激に大学への進学率が上昇し、受験競争が激化している。その中で、教員の健康が悪化し、とくに、ストレス問題が表面化してきている。日本と中国は受験競争が激化していることでは共通しているが、選抜などに関わる教育制度が違うため、両国教員のストレッサーとストレスの現れ方が異なると考えられる。そこで、本研究では中国の東北部に位置している黒龍江省の高校教員を調査対象として、教員の勤務状況と健康実態を把握し、且つ、いかなる勤務状況がどのように教員の健康に影響を与えているかを明

らかにする。また、教員の仕事上のストレス要因とストレス反応を明らかにする。さらに、調査結果については筆者が2003年にハルビン市で行った調査結果^(注1)、2005年に労働科学研究所が中心となって行った日本の教職員の健康調査^(注2)、および日本の労働者25万人の調査^(注3)と比較した。

II. 対象と方法

2007年11月～12月中旬にかけて黒龍江省の省都であるハルビン市(10校)と牡丹江市(1校)の省重点校、市重点校、普通校の合計11校の高校教員を対象とし

て「高校教員の労働実態と健康問題、および労働ストレス」に関するアンケート調査を行った。

配布数 350 枚のうち 311 枚が回収された（回収率は 88.9%）。調査は各学校長等管理職に依頼し、教員に配布、回答後、回答者が密封した調査票を後日回収した。

調査回答者の内訳は男性が 114 名（36.7%）、女性が 197 名（63.3%）である。

調査内容は勤務状況、自覚的健康感、ストレス要因とストレス反応などである。

ストレス要因およびストレス反応に関する質問項目は、旧労働省委託研究「作業関連疾患の予防に関する研究」によって作成された「職業性ストレス簡易調査票」の質問を筆者が中国語に訳したものをを用いた。

職業性ストレス簡易調査表を下記のような下位尺度を用いて分類した。ストレス要因（職業性ストレスサー）に関する下位尺度は 9 つで、心理的な仕事の量的負担（項目 1～3）、と質的負担（項目 4～6）、身体的負担（項目 7）、コントロール（項目 8～10）、技術の活用（項目 11）、対人関係（項目 12～14）、職場環境（項目 15）、仕事の適性度（項目 16）、働きがい（項目 17）で構成されている。ストレス反応については、心理的なストレス反応の下位尺度は 5 つで、ポジティブな心理的な反応の尺度として活気（項目 1～3）、ネガティブな心理的な反応の尺度としてイライラ感（項目 4～6）、疲労感（項目 7～9）、不安感（項目 10～

12）、抑うつ感（13～18）から成り、身体的ストレス反応は身体愁訴についての 11 項目（項目 19～29）から構成される。

集計にあたっては、上記研究で示されている男女別の素点換算表を用いて、1:「低い/少ない」、2:「やや低い/少ない」、3:「普通」、4:「やや高い/多い」、5:「高い/多い」の 5 段階に得点化した。本稿では、そのうち、問題とすべき方の「高い（5）」或いは「低い（1）」の割合を用いて論じる。

Ⅲ. 調査結果

1. 労働実態

調査対象者に直前の約 2 ヶ月における、1 週あたりの超過勤務時間、休日出勤、昼休みの取得と持ち帰り仕事の頻度、仕事の忙しさなどの勤務状況を訊ねた（表 1）。

仕事の多忙の項目に関しては、「教職員の健康調査」の日本の高校教員の数値と比較した。

多い週における 1 週間にあたりの超過勤務について、「10 時間未満」をする者の割合が約 3 分の 1 程であった。また、「20 時間未満」と「20 時間以上」の回答比率を合わせると、多い週には約 4 分の 1 の教員が「10 時間以上」の超過勤務をしていた。少ない週の場合は、「20 時間未満」と「20 時間以上」の回答比率を合わせると、少ない週でも 8% の教員が「10 時間以上」の超過勤務をしていた。

表 1. 労働実態

労働実態	回 答 分 布 [単位:人(%)]				
週に超過勤務時間	なし*	10 時間未満	20 時間未満	20 時間以上	
多い週	122(39.2)	112(36.0)	62(19.9)	15(4.8)	
少ない週	159(51.1)	127(40.8)	20(6.4)	5(1.6)	
休日出勤 (この 2 ヶ月間)	なし	1-4 日	5 日以上	殆ど全て出勤	
	63(20.7)	110(36.2)	79(26.0)	52(17.1)	
昼休みの取得	きちんと取れた	偶に取れない	時々取れない	取れないことが多かった	いつも取れない
	76(24.5)	55(17.7)	65(21.0)	61(19.7)	53(17.1)
週に持ち帰り 仕事日数	なし	1 日程度	2-3 日	4 日	5 日
	47(15.9)	52(17.6)	96(32.4)	21(7.1)	80(27.0)
持ち帰り仕事の時間	なし	2 時間未満	4 時間未満	4 時間以上	
多い日	47(17.5)	23(8.6)	135(50.4)	63(23.5)	
持ち帰り仕事の時間	なし	1 時間未満	2 時間未満	2 時間以上	
少ない日	53(20.2)	27(10.3)	134(51.0)	49(18.6)	
仕事の多忙 (2 ヶ月間)	忙しくなかった	多少忙しかった	忙しい日が多かった	毎日のように忙しかった	
中国高校教員*	13(4.3)	56(18.6)	108(35.9)	124(41.2)	
日本高校教員*	(9.8)	(36.0)	(34.1)	(20.1)	

注) *NA を含む *注)中国高校教員:本調査

日本高校教員:労働科学研究所「教職員の健康調査」2006

休日の出勤について、「ほとんど全ての休日に出勤している」「5日以上」の回答を合わせると、40%以上の人は休日に頻繁に出勤していた。

勤務時間中に昼休みの取得について、「いつもきちんと取れた」の割合は4分の1に過ぎない。

持ち帰り仕事の頻度を見ると「4日/週あった」「5日/週あった」の回答比率を合わせると、34.1%になるが、3割程の教員は週に頻繁に持ち帰り仕事があった。1日あたり持ち帰りの時間について、多い日には「4時間以上」と「4時間未満」の回答比率を合わせると、約7割(73.9%)の教員は多い日には1日あたり「2時間以上」の持ち帰り仕事をしている。少ない日の場合は「2時間以上」の回答比率が5分の1程であった。少ない日であっても、約2割の教員は1日あたり「2時間以上」の持ち帰り仕事をしている。

仕事の忙しさに関して、「忙しい日が多かった」と回答した者の比率(35.9%)は全体の3分の1程であったが、それを日本の教職員の健康調査の数値に比べて見ると、日本高校教員(34.1%)よりやや高かった。しかし、「毎日のように忙しかった」の割合は4割であり、日本高校教員(20.1%)より2割程高かった。さらに、「忙しい日が多かった」「毎日のように忙しかった」両者の回答比率を合わせると、約80%の中国高校教員はこの2ヶ月間が多忙だと考えられた。

ここで重要なことは休日出勤の頻度と持ち帰り仕事の多さについて、一つの面で忙しい人たちはほかの面も忙しいという特徴がある。すなわち、特定の教員たちの疲労度が特に激しいという傾向があることである。以下に、昼休みが取りにくいグループと超過勤務が多いグループ、また、休日出勤が多いグループと持ち帰り仕事が頻繁なグループが重なっているところを見ていこう。

表2と表3で示したように、超過勤務が「20時間以上」と回答したグループは66.7%が昼休みを「ほとんど取れなかった」と回答した。一方、「週に4、5日程度の持ち帰り仕事」があると回答したグループでは、「休日に頻繁に出勤した」と回答した教員の割合が47.5%と最も多かった。

表4. 校種別と多忙な勤務状況 [単位:人(%)]

項目	4、5日/週 持ち帰り仕事がある	昼休みを殆ど取れない	2ヶ月間 毎日のように忙しい
普通校	10(18.9)	11(19.3)	11(20.0)
市重点校	45(47.9)	44(45.4)	44(46.8)
省重点校	46(30.9)	59(37.8)	69(45.4)
全体	101(34.1)	114(36.8)	124(41.2)
有意差	P<0.01	P<0.01	P<0.01

勤務実態と校種の関係について、表4に示されるように「週に4、5日持ち帰る仕事がある」「昼休みをほとんどとれなかった」および「2ヶ月間、毎日のように忙しかった」という回答の割合は市および省重点校のほうが統計上で有意に高かった。多忙さは学校種により異なり、重点校ほど忙しいという結果となった。

2. 健康状態

(1) 疲労感およびストレス症状

調査対象者に直前の約2ヶ月における、健康状態や心身の疲れ具合、仕事や職業生活に対する不安や将来の健康不安について訊ね、表にした(表5)。2003年調査と「教職員の健康調査」の日本高校教員の数値も比較として入れている。

自覚的健康感を見ると「非常に健康状態が悪い」の回答(6.1%)が、「2003年調査」の結果(1.7%)より高い数値になった。「やや健康状態が悪い」も含めると、

表2. 昼休み取得と超過勤務 [単位:人(%)]

項目	1週あたりの超過勤務時間					
	なし	10時間未満	20時間未満	20時間以上	全体	
昼休み	ほとんど取れなかった	33(27.3)	41(36.6)	30(48.4)	10(66.7)	141(36.8)
	時々・偶に取れなかった	52(43.0)	43(38.4)	21(33.9)	4(26.7)	120(38.7)
	いつもきちんと取れた	36(29.8)	28(25.0)	11(17.7)	1(6.7)	76(24.5)

p<0.05

表3. 休日出勤と持ち帰り仕事 [単位:人(%)]

項目	1週あたりの持ち帰り仕事				
	ない	1-3日/週	4、5日/週	全体	
休日出勤	頻繁出勤	18(38.3)	61(41.8)	47(47.5)	126(43.2)
	1-4日	12(25.5)	57(39.0)	38(38.4)	107(36.6)
	ない	17(36.2)	28(19.2)	14(14.1)	59(20.2)

p<0.05

37.5%となり、2003年の数値(23.4%)より非常に高い。これに対し「まあ健康である」と「非常に健康である」は、76.1%から47.3%まで激減している。今回調査対象

者全体の健康状態は2003年の調査に比べ、非常に悪化していることが分かる。具体的に見ると、まず、身体と精神の疲れ具合が挙げられる。

表5. 健康状態

健康状態	回 答 分 布 [単位:人(%)]				
自覚的健康感	非常に悪い	やや悪い	どちらとも言えない	まあ健康	非常に健康
本調査	(6.1)	(31.4)	(15.2)	(39.5)	(7.8)
2003年調査	(1.7)	(21.7)	—	(69.1)	(7.0)
疲労感	殆ど疲れない	あまり疲れない	どちらとも言えない	やや疲れる	とても疲れる
身体的疲労	10(3.2)	28(9.0)	14(4.5)	174(56.1)	84(27.1)
精神的疲労	16(5.2)	44(14.2)	14(4.5)	150(48.4)	86(27.7)
翌朝への疲労の持ち越し	殆どない	あまりない	どちらとも言えない	時々ある	いつもある
本調査	18(5.8)	30(9.7)	5(1.6)	112(36.1)	145(46.8)
強い不安、悩み等	ない	どちらとも言えない	ある		
本調査	(13.9)	(16.1)	(70.0)		
日本高校教員*	(34.7)	—	(65.3)		
将来の健康不安	持っていない	少し持っている	大変持っている		
本調査	(19.0)	(63.9)	(17.1)		
日本高校教員*	(11.3)	(61.8)	(26.9)		
定期健康診断	ない	ある			
本調査	153(49.5)	156(50.5)			
2003年調査	146(64.3)	81(35.7)			
日本高校教員*	(11.9)	(88.1)			

*注)日本高校教員:労働科学研究所「教職員の健康調査」2006

仕事での身体の疲れ具合について、「とても疲れる」と「やや疲れる」の回答比率を合わせると、80%以上の教員は身体の疲れを感じている。一方、仕事での精神の疲れ具合を見ると、4分の1以上の方が「とても疲れる」と答えていた。「やや疲れる」も合わせると、全体の76.1%が精神的に疲れている。

翌朝への疲労の持ち越しについては2003年調査で、次の日までに疲れが「取れる」と回答した割合が27.4%であった。本調査では、前日の疲労の翌朝への持ち越しが「ほとんどない」と「あまりない」の回答を合わせても15.5%しかない。「いつもある」の回答比率が46.8%と半分近い。この数値は2003年調査「疲れがいつも取れない(13.1%)」の約4倍である。また、「時々ある」と「いつもある」の回答を合わせると82.9%になるが、2003年調査では疲れが「時々取れない」と「いつも取れない」の割合を合わせると71.4%であり、10ポイント以上上昇している。前日の疲労の翌朝への持ち越しは4年前より悪化している。

仕事や職業生活に強い不安、悩み、ストレスを感じている者の割合をみると「ない」者の割合(13.9%)が日本高校教員より少なく、「ある」者の割合が70%と、日本高校教員(65.3%)よりやや高かった。

将来の健康への不安に関しては、「少し不安」とする者の比率は日本高校教員の数値よりやや高いが、ほぼ同様の傾向が見られる。「少し不安」と「大変不安」の回答を合わせると、80%以上の中国高校教員、90%近くの日本高校教員は将来の健康に不安を持っている。中国高校教員の健康状態も日本高校教員と同じく深刻な問題を抱えている。

定期健康診断受診の有無について、「ない」と回答しているのは全体で49.5%であり、約半数の人が過去1年間に定期健康診断を受けていなかった。2003年の調査結果と比べ、「ある」とした者の比率は15ポイント増加し、4年前より受け率が高く見られた。しかし、日本高校教員に比べると、中国教員の受け率が日本教員より40ポイント程少ない。

(2) 多忙感と健康・ストレスの関わりについて

表6. 多忙さと自覚的健康感

[単位:人(%)]

項 目	忙しくなかった	多少忙しかった	多忙
健康である	12(92.3)	36(65.5)	94(40.7)
どちらとも言えない	0	5(9.1)	40(17.3)
健康状態悪い	1(7.7)	14(25.5)	97(42.0)

直前 2 ヶ月の忙しさと自覚的健康感との関連を見ると、表 6 に示したように忙しければ忙しいほど「健康状態が悪い」と回答する者の比率が高くなり、「健康である」と回答する者の比率が低くなる傾向が見られた。とくに、「多忙」と回答した教員の 40%以上が「健康状態が悪い」という結果となった。また、統計上でも有意差が見られた (P<0.001)。多忙さと健康状態にはかなり密接な関係が見られた。

表 7. 身体・精神の疲労感と多忙状況 [単位:人(%)]

項目	忙しなかった	多少忙しかった	多忙	
身体	疲れない	7(53.8)	17(30.9)	12(5.2)
	疲れる	6(46.2)	33(60.0)	211(90.9)
精神	疲れない	6(46.2)	20(35.7)	30(13.0)
	疲れる	7(53.8)	31(55.4)	192(83.1)

また、忙しさと身体・精神の疲れ具合の関連を見ると (表 7)、忙しければ忙しいほど、身体・精神が「疲れる」と訴え比率が高くなる傾向が見られる。「多少忙しかった」と回答したグループでは、約 60%が「身体が疲れる」、約 55%が「精神的に疲れる」と考えていた。さらに「多忙」と回答したグループでは、90%以上の教員が「身体が疲れる」、80%以上の教員が「精

神的に疲れる」と考えていた。統計上でも有意差が見られた (P<0.001)。

3. 仕事上のストレス

(1) ストレス要因とストレス反応、及び両者の関連

9 種のストレス要因の中で、男女とも「仕事の量的負担度が高い」「仕事の質的負担度が高い」の割合が多く、「身体的負担度が高い」「職場環境の要因が高い」も多く、共通している。「技術の活用度が低い」の割合は男女の違いが大きい (表 8)。ストレス反応では共通して、男女教員とも「身体愁訴が高い」「抑うつ感が高い」という反応がほかの反応に比べて多かった。男女とも「抑うつ感が高い」割合が多かったが、女性のほうが少ない (表 9)。

ストレス要因とストレス反応の関連では (表 10)、「負担」は「身体愁訴」の関連が有意であり、そのうち、「量的負担」と「質的負担」は男女とも有意である。「仕事の適性度」はその他の反応 (「活気」～「抑うつ反応」) との関連が男女とも有意 (「疲労感」は女性のみ有意) となっている。「活気」～「抑うつ反応」のストレス反応とストレス要因の関連は、女性のみ有意である傾向がみられる。

表 8. 中国高校教員のストレス要因 (%)

中国高校教員のストレス要因	男性 (N=114)	女性 (N=197)
仕事の量的負担度が高い	21.8	12.3
仕事の質的負担度が高い	12.8	23.0
身体的負担度が高い	10.8	6.7
コントロール度が低い	8.3	4.7
技術の活用度が低い	12.5	3.6
対人関係の要因が高い	0	1.7
職場環境の要因が高い	14.3	9.3
仕事の適性度が低い	5.4	3.1
働きがいが高い	5.4	2.6

表 9. 中国高校教員のストレス反応 (%)

中国高校教員のストレス反応	男性 (N=114)	女性 (N=197)
活気が低い	3.7	4.2
イライラ感が高い	8.5	2.7
疲労感が高い	8.3	4.8
不安感が高い	9.3	4.2
抑うつ感が高い	21.5	7.9
身体愁訴が高い	28.6	19.9

表 10. ストレス要因とストレス反応の関連 男性(左) 女性(右)

項目	男性(左)				女性(右)							
	活気	イライラ感	疲労感	不安感	抑うつ感	身体愁訴						
量的負担	ns	ns	ns	***	**	**	ns	**	ns	ns	***	**
質的負担	ns	ns	ns	**	ns	**	*	**	ns	**	*	**
身体的負担	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	**	ns
コントロール	**	***	ns	**	ns	*	ns	**	**	**	ns	ns
技術の活用	ns	ns	*	**	ns	*	ns	**	*	***	ns	ns
対人関係	ns	**	ns	**	ns	*	ns	*	*	**	*	ns
職場環境	ns	*	ns	**	ns	*	ns	***	ns	ns	ns	*
仕事の適性度	***	*	*	***	ns	**	**	***	***	**	ns	ns
働きがい	ns	**	ns	***	ns	ns	*	ns	**	***	ns	*

注: *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001 ns=no significant

これらストレス要因・ストレス反応と「自覚的健康感」の関連を、男女 2 群で検討してみた (表 11)。

(2) ストレス要因・ストレス反応と「自覚的健康感」の関連

表 1 1. ストレス要因・ストレス反応と自覚的健康感の関連

ス ト レ ス 要 因 ・ 反 応		健 康 感 が 悪 い *			
		男 性		女 性	
項 目		%	P**	%	P**
量的 負担	高い/やや高い	49.0	0.000	52.1	0.000
	高くない	27.8		24.7	
質的 負担	高い/やや高い	44.6	0.031	45.3	0.007
	高くない	33.3		26.4	
身体的 負担	高い/やや高い	43.8	0.156	46.5	0.156
	高くない	36.5		36.5	
コント ロール	高い/やや高い	46.2	0.038	42.9	0.324
	高くない	34.6		37.0	
技術 の活用	高い/やや高い	43.8	0.141	51.2	0.038
	高くない	35.9		34.4	
対人 関係	高い/やや高い	48.2	0.034	44.4	0.203
	高くない	33.9		34.0	
職場 環境	高い/やや高い	48.5	0.005	49.2	0.028
	高くない	32.5		33.3	
仕事の 適性度	高い/やや高い	47.2	0.142	55.0	0.078
	高くない	36.4		35.8	
働き がい	高い/やや高い	39.4	0.486	40.0	0.506
	高くない	37.5		37.6	
活 気	高い/やや高い	56.0	0.044	52.9	0.142
	高くない	36.3		36.5	
イラ イラ感	高い/やや高い	41.9	0.283	31.3	0.379
	高くない	37.0		38.8	
疲労 感	高い/やや高い	49.5	0.002	58.5	0.002
	高くない	31.4		31.5	
不安 感	高い/やや高い	51.4	0.004	59.1	0.001
	高くない	33.2		31.0	
抑うつ 感	高い/やや高い	47.3	0.014	43.5	0.211
	高くない	33.0		35.5	
身体 愁訴	高い/やや高い	49.4	0.000	54.5	0.000
	高くない	25.4		27.5	

注)*:「自覚的健康感が悪い」は「悪い」及び「やや悪い」の合計

**P は Fisher の直接確率法(片側)による

全体的に見る (表 11) と、男女とも量的負担・質的負担は健康感に関連していることが認められる。それと同時に、健康感の悪さに関係しているものはいろいろな症状がとくに、メンタルの疲労、不安、身体愁訴に感じる症状は男女とも同じような関連が認められた。量的負担や質的負担や疲労感やメンタルな状況を引き

起こすことは健康感が悪くなっている一つの側面ではないかと考えられる。

「仕事のコントロール」「対人関係」「活気」「抑うつ感」は男性のみ有意である。「技術の活用」は女性のみ有意であり、関連の度合いは男性と違っている。

(3) 重点校と普通校の比較

表 1 2. ストレス要因の比較

ストレス要因の比較	男性(%)			女性(%)		
	普通校 (N=13)	市重点校 (N=33)	省重点校 (N=68)	普通校 (N=44)	市重点校 (N=64)	省重点校 (N=89)
量的負担度が高い	15.4	37.5	15.4	0.0	26.6	8.0
負担度が高い	7.7	16.7	12.1	16.3	32.3	19.8
身体的負担度が高い	23.1	12.5	7.6	9.3	6.3	5.7
コントロール度が低い	15.4	12.5	4.7	2.4	6.3	4.6
技術の活用度が低い	15.4	18.8	9.0	0.0	6.3	3.5
対人関係の要因が高い	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	1.2
職場環境の要因が高い	38.5	15.6	9.0	16.3	6.5	8.0
仕事の適性度が低い	15.4	3.1	4.5	2.3	4.8	2.3
働きがいが高い	7.7	9.4	3.0	0.0	3.2	3.4

ストレス要因の比較を見ると、表 12 に示したとおりに、市重点校では男女教員とも「仕事の量的負担度が高い」「仕事の質的負担度が高い」を訴えている割合が三校の中で最も高かった。普通校では男女教員とも「職場環境の要因が高い」の割合が最も高かった。

ストレス反応の比較に関して、表 13 に示されたよ

うに、どの校種も男性は「抑うつ感が高い」「身体愁訴が高い」の割合が高かった。一方、女性の場合も「身体愁訴が高い」「抑うつ感が高い」の割合は高かったが、男性との差が大きい。また、「活気が低い」は普通校の男性で高く、「イライラ感が高い」は市重点校の男性で高かった。

表 1 3. ストレス反応の比較

ストレス反応の比較	男性(%)			女性(%)		
	普通校 (N=13)	市重点校 (N=33)	省重点校 (N=68)	普通校 (N=44)	市重点校 (N=64)	省重点校 (N=89)
活気が低い	15.4	3.1	1.6	0	3.3	7.1
イライラ感が高い	8.3	16.1	4.8	0	3.4	3.5
疲労感が高い	0	9.7	9.4	2.4	4.9	5.7
不安感が高い	0	9.4	11.1	2.3	4.9	4.7
抑うつ感が高い	30.8	25.8	17.5	4.5	8.2	9.5
身体愁訴が高い	23.1	33.3	27.4	7.3	25.4	22.2

(4) 中国高校教員と日本高校教員および日本労働者との比較

ストレス要因の比較に関しては (表 14)、中国高校教員 (男女とも) は日本高校教員と同じく「仕事の量的負担度が高い」「仕事の質的負担度が高い」の割合が日本労働者より強かった。その二つ要因の高さは日・中に共通している。また、中国の男女高校教員とも「身体的負担度が高い」の割合が高いが、日本の高校教員ほど高くない。「対人関係の要因が高い」は日本の男女教員ともある程度高いが、中国の教員が低い。「職場環境の要因が高い」は日本の男女教員が大きな差異が見られたが、中国教員の男女差が大きい。

男性の場合は「仕事の量的負担度が高い」「仕事の

質的負担度が高い」「身体的負担度が高い」の割合が中・日教員とも多かった。また、「対人関係の要因が高い」「職場環境の要因が高い」が両者の割合が極端に違う。一方、女性の場合には中・日教員とも「仕事量的負担度が高い」「仕事質的負担度が高い」が多く、「働きがいが高い」が少ない。その三つ要因は両者が共通している。相違点に関して、中国教員の「身体的負担度が高い」「対人関係の要因が高い」「職場環境の要因が高い」が日本教員より極めて低かった。

ストレス反応の比較に関しては (表 15)、第 1 の特徴としては中国の男女高校教員とも「活気が低い」の割合が少なく、日本教員・日本労働者に比べても極めて少ない。第 2 の特徴としては中国の男女高校教員と

も「抑うつ感が高い」「身体愁訴が高い」が日本教員・日本労働者より多い。特に「身体愁訴が高い」の割合が中国の男女教員とも高い。

IV. 考察

1. 先行研究からの考察

中国人民大学公共管理学院グループと人力資源研究所及び新浪教育チャンネル(注4)は2005年に「中国教員の仕事ストレスと心理健康調査」を行った。そこでは20%の教員の身体的健康状態が、40%近くの教員は心理的健康状態が良好ではない、30%近くの教員は深刻なバーンアウト状態にあることが明らかになった。また、72.5%の高校教員は仕事のストレスが中学校、小学校等と比較して著しく高いと思っっていることが明らかになった。以上のように中国の高校教員の健康問題とりわけストレスが大きな問題となっていることが分かった。

2. 中国における近年の教育状況

中国では1992年に政府によって、市場経済化政策・

高等教育多様化が打ち出されて以来、大学はエリート教育から大衆化に向かおうとしている。そのことはかえって有名大学への進学競争をあおり、日本で言う高校レベルでの進学競争を激しくした。その中でも、予算が集中的に分配される重点高校は有名大学に進学率が高いことなどが理由となり、非常に人気が高い。近年、教育改革が再び進化するとともに、高校教員への教授技術、学歴などへの要求もますます高くなっている。一部分の教員にはこれらの要求にうまく対応できないゆえに、不安などの症状が現れている。学校は生徒の進学率で高校教員のレベルを評価し、高校教員は学校、親から生徒を有名大学に進学させるよう期待されている。加えて、高校教員の労働の過重さに対し、収入と待遇が低いことも教員のメンタルヘルスに影響している。

3. 本調査の結果から明らかになったこと

第1に教員の勤務の多忙化が拡大していることである。

40%以上の教員が休日に頻繁に出勤していた。昼休

表14. ストレス要因の比較

ストレス要因の比較 項目	男 性 (%)			女 性 (%)		
	1.中国 高校教員	2.日本 高校教員	3.日本 労働者	1.中国 高校教員	2.日本 高校教員	3.日本 労働者
量的負担度が高い	21.8	21.4	10.4	12.3	19.3	5.8
質的負担度が高い	12.8	8.3	5.7	23.0	22.8	10.3
身体的負担度が高い	10.8	18.6	8.2	6.7	24.0	9.6
コントロール度が低い	8.3	9.9	5.4	4.7	2.3	5.5
技術の活用度が低い	12.5	5.0	4.5	3.6	1.2	9.1
対人関係の要因が高い	0	12.0	4.5	1.7	7.0	6.4
職場環境の要因が高い	14.3	0	13.8	9.3	25.3	21.7
仕事の適性度が低い	5.4	5.8	6.4	3.1	3.5	9.3
働きがいが高い	5.4	7.9	7.3	2.6	2.3	13.1

出典：1.本調査 2.労働科学研究所「教職員の健康調査委員会」2006
3.厚労省「職場環境等の改善によるメンタルヘルス対策に関する研究」2005

表15. ストレス反応の比較

ストレス反応の比較 項目	男 性 (%)			女 性 (%)		
	1.中国 高校教員	2.日本 高校教員	3.日本 労働者	1.中国 高校教員	2.日本 高校教員	3.日本 労働者
活気が低い	3.7	21.6	10.8	4.2	22.2	13.4
イライラ感が高い	8.5	10.0	4.9	2.7	7.1	8.8
疲労感が高い	8.3	14.5	7.4	4.8	7.8	7.4
不安感が高い	9.3	10.4	7.1	4.2	7.1	5.8
抑うつ感が高い	21.5	12.9	6.5	7.9	7.1	7.2
身体愁訴が高い	28.6	9.5	7.4	19.9	10.1	7.8

みをきちんと取れる者の割合は4分の1程度に過ぎず、約60%の人が昼休みを取れていない実態であった。午後5時に仕事が終了するはずが、多い時期は約25%の教員が週あたり「10時間以上」の超過勤務、少ない時期でも8%の教員が「10時間以上」の超過勤務をしていた。しかも、超過勤務だけではなく、30%以上の教員は頻繁に持ち帰り仕事をしてきた。また、多忙感については、約80%が「多忙」と感じている。これは日本高校教員(54.2%)に比べて極めて高いと言える。また、校種により、忙しさも異なるが、実際の調査結果を見ると、市重点校、省重点校である進学校ほど、忙しいという結果が出てきている。重点校のほうが統計上で有意に高かった。

第2に2003年に比べると教員全体の健康状態はさらに悪化していたということである。

具体的に見ると、80%以上の教員が「身体の疲れ」、約76%の教員が「精神の疲れ」を訴えた。また前日の疲労の翌朝への持ち越しがある教員は2003年の調査より増加した。とくに健康状態と関わる「仕事や職業生活に強い不安、悩み、ストレス」が「ある」と回答した比率が70%であった。これはほぼ日本(65.3%)と同じような傾向と言えるが、深刻さを窺わせるものである。また、将来の健康不安の割合は80%以上が持っている。中国教員の健康状態も深刻な問題になったと言える。

第3に多忙な勤務実態は教員たちの健康に深く関わっていた。忙しさと健康状態の関連を見ると、忙しければ忙しいほど「健康状態が悪い」の回答比率が高くなり、「健康である」の回答比率が低くなる傾向が見られた。具体的に身体・精神との関係についても同じような傾向が見られ、「多忙」と回答した教員の中では「身体・精神具合疲れる」を訴えている比率が高かった。以上で示されたように、多忙な勤務実態は教員たちの健康を悪化させていると言えよう。

第4に中国高校教員のストレス反応について、男性では「抑うつ感が高い」「身体愁訴が高い」が最も高かった。女性では「身体愁訴が高い」が高かったが、「抑うつ感が高い」が男性ほど高い状況ではなかった。この違いは何に由来するのか本調査では明らかに出来なかった。今後の課題として検討したい。同様に、この原因になっているストレス要因については、男女とも「仕事の量的負担度が高い」「仕事の質的負担度が高い」が高かった。「職場環境の要因が高い」「技術の活用度

が低い」は男性が高かった。「仕事の質的負担度が高い」は女性が高かった。どんな要因で男女の差が見られたか今後は検討したい。以上で述べたように男女教員のストレス要因「仕事の量的・質的負担度」が高い特徴が見られた。これに対し、杭州市教育研究所^(注5)が行った調査の結果を見てみたい。76%の教員が仕事の負荷が大きいと感じており、特に高校教員、男性教員のストレス発生率が高いことが明らかにしていた。今回の調査結果はこれと合致する。したがって、中国の高校教員は「仕事の量的・質的負担度が高い」が強いことを今回調査の対象者の特徴であるとともに、中国の教育現場の特徴であるとも考えられる。

第5にストレス要因・ストレス反応と「自覚的健康感」の関連では男性は有意な関連が出た項目が多く、女性がそれよりも少し少なかったが、仕事のコントロールや、対人関係や、技術の問題や、働きかたが職場における人間関係の状況に男女の大きな差がないのではないかと考えられる。

第6に校種(省重点校、市重点校、普通校)の間に、ストレス要因及びストレス反応の回答状況に相違が見られた。

市重点校の「仕事の量的負担度が高い」「仕事の質的負担度が高い」割合が三校種の中で最も高かったことに注目したい。この結果に対し、近年、市重点校の教員たちは省重点校のように進学率を上げることを目指して、教育レベルを高めることなどを要求されている。また、生徒の質、教員のレベルが省重点校ほど優秀ではないため、すぐ慣れてない教員が多いことが考えられる。また、普通校の「職場環境ストレスが高い」の割合が最も高かった。普通校の職場の環境(騒音、照明、温度、換気など)がよくない状況が普通校の高校教員の主なストレス要因であることが明らかになった。

第7に日・中の高校教員の間に心理的な仕事の量的・質的ストレス要因は日本の労働者より高率な点で共通しており、「身体負担度が高い」「対人関係の要因が高い」「職場環境の要因が高い」等の相違点が見られた。

本調査結果により「市重点校」で「ストレス要因」「ストレス反応」が高い傾向が見られた。学校3群、男女別2群の計6群で、計量分析を行うには、データの数が少ないかもしれないが、今後データの数を増やし、更に検討したい。

注

- (1) 王穎 (2003) P30 以下、この調査結果からの引用は「2003 年調査」とする
- (2) 教職員の健康調査委員会 (2006) P45 P71 P72 以下、この調査結果からの引用は「日本高校教員」とする
- (3) 厚労省 (2005) P11 P12 以下、この調査結果からの引用は「日本労働者」とする
- (4) 中国人民大学公共管理学院組織と人力資源研究所及び新浪教育チャンネル「教師生存状況調査報告」2005
- (5) 張楽「調査显示：中小学教師普遍感覺職業压力太大」新華社 2001.10.18 <http://fz.ccjy.cn/html/jsyd/jsxs/j2.htm>

文献

- 1) 王穎「中国における教員の生活・勤務・健康実態に関する研究」北海道大学大学院教育学研究科修士論文 2003
- 2) 教職員の健康調査委員会『教職員の健康調査 調査報告書』2006 労働科学研究所
- 3) 厚労省「職場環境等の改善によるメンタルヘルス対策に関する研究」2005
- 4) 興梠一郎『現代中国グローバル化なかで』岩波新書 2002
- 5) 福地保馬「健康問題から見た教員の労働負担と課題」『人間と教育』44 2004 P25-32
- 6) 方方『教師心理健康研究』北京：人民教育出版社 2003
- 7) 王 智新『現代中国の教育』明石書店 2004